Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-12-05

Characteristics of Male Family Caregivers in Japan and Their Sense of Care Burden, Capacity to Deal with Stress, and Subjective Sense of Well-Being

Uemura, Sayoko

(Degree)
博士（保健学）
(Date of Degree)
2015-03-06
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙第3267号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003267

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式５）

学位論文の内容要旨

氏　　名　　植村　小夜子

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること.）

Characteristics of Male Family Caregivers in Japan and Their Sense of Care Burden, Capacity to Deal with Stress, and Subjective Sense of Well-Being
（日本における男性家族介護者の介護の実態：介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感と介護の特徴）

（別紙様式５）

（氏名：植村小夜子　NO.1）

要旨

1. 目的

現在，世界で最も長寿国である日本は，高齢化と家族の人員減少がすすむ中で，疾病を抱え介護を必要とする高齢者が急増しており介護に関する問題が深刻化している．加えて女性の社会進出などにより，在宅での介護に伴う家族看護力の低下が進行し，家族介護者支援の重要性が増してきている．2012年度の65歳以上の人口の割合は，24%に達している．主な介護者の性別をみると，男性が 30.6%，女性が 69.4%と女性が多いものの，男性が介護を担う割合は年々増加の傾向にある．従って，男性家族介護者（以下：男性介護者とする）の実態を明らかにしていくことは，重要な課題である．

本研究の目的は，在宅で介護をしている男性介護者の介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感の実態と彼らの特徴について明らかにすることである．

2. 研究方法

1） 対象者：在宅で家族の介護をしている男性介護者 27 人．

2） 調査方法：2014 年 3 月～5 月に対象者の自宅へ訪問し，質問紙調査とインタビューガイドを用いた半構成的面接を行った．対象者の年齢・職業の有無・疾病治療の有無・飲酒の有無・喫煙の有無・趣味の有無・睡眠時間・介護歴を聴取した．加えて，被介護者の年齢・介護者との続柄・疾病・生活自立度を聴取した．

(1) 質問紙：質問紙調査は，Zarit 介護負担感尺度日本語版(以下：J-ZBI_8)，Sense of Coherence(ストレス対処能力をみる指標である．以下：SOC_13)，Self-related Health（主観的健康感を表す．以下：SRH）を用いた．

(2) インタビュー：インタビュー内容は，「介護を始めたきっかけ」「どのように介護しているか」「日々の介護について感じていること」「他の介護者との交流」「終末期の対応について」である．

3） 分析方法：質問紙調査は以下の検討を行った．基本情報の調査項目について属性により群別し，J-ZBI_8，SOC_13，SRH の各得点に差があるか比較検定を行った．2 群間の検定には Mann-Whitney test，3 群間の検定には Kruskal-Wallist test ，下位検定には，Scheffe test を用いた．J-ZBI_8，SOC_13，SRH の相関は Spearman's rank correlation coefficient を用いた．有意水準は，5%とした．解析には SPSS 20.0J for Window を用いた．インタビュー調査は，インタビュー結果を逐語録にしたものをデータとした．逐語録を熟読し，データの相違性を考慮し内容を抽象化しサブカテゴリーを抽出した．そのサブカテゴリーからカテゴリー，さらにコアカテゴリーとその抽象度を高めた．データ分析は，信頼性・妥当性を高めるためのスーパーバイズを受けながら行った．

4） 倫理的配慮

本研究は，滋賀県立大学倫理審査委員会の承認のもとに実施した．

3. 結果

1）質問紙調査の結果：男性介護者の SRH は，年齢が 65 歳未満群の方が，75 歳以上群より

も有意に高かった（p=.043）．治療の有無別の SRH は，無し群の方が，有り群よりも有意に高かった（p=.001）．また，J-ZBI_8 は，趣味の有無において，有り群の方が，無し群よりも有意に低かった（p=.049）．その他の項目では，有意差は認められなかった．J-ZBI_8 と SOC_13（p<.01）及び J-ZBI_8 と SRH（p<.01）で有意な負の相関を示した．SOC_13 と SRH の相関はみられなかった．

2）インタビューの結果：在宅で介護している男性の特徴として 1 つのコアカテゴリー：{介護をまるで仕事のように捉えている}が抽出された．このコアカテゴリーは 4 つのカテゴリーから構成されていた．

[介護方法にこだわりがある]のカテゴリーは，＜自分以外の人には任せられない＞＜介護を自分のやり方でやりたい＞＜被介護者に自分の思い通りにしてほしい＞という 3 つのサブカテゴリーで，[介護方法は自分で学びとる]のカテゴリーは，＜生活援助に過去の経験を活かす＞＜介護について書籍から知識を得る＞＜介護者会にはほとんど参加しない＞という 3 つのサブカテゴリーで，[社会で働いていた知恵が介護に活かされている] のカテゴリーは，＜時間管理が上手い＞＜他人に弱さを見せない＞＜制度などを自己で選択し使いこなす＞という 3 つのサブカテゴリーで，[先を見越した介護をする] のカテゴリーは，＜被介護者の状態が今よりも良くなるようにと考えて介入している＞＜被介護者の急性期・終末期の対応について判断基準を準備している＞という 2 つのサブカテゴリーで，構成されていた．

4．考察

本研究の質問紙調査の結果からは，ストレス対処能力が高いかまたは，主観的健康感が良い場合には，介護負担感は軽い傾向であった．健康でストレスへの対処能力が高いことは，介護負担を軽くする要因であると考えられた．彼らが介護している被介護者の疾患の種類や重症度の違いは，彼らの介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感にあまり影響を与えてはいなかった．趣味がある介護者の介護負担感は軽く，介護者にとって気分転換がはかれる時間を持つことの大切さが明らかとなった．

インタビューから抽出した男性介護者の特徴から以下のことが考えられた．

[介護方法にこだわりがある]という特徴は，自分の介護に自負と自信を持っており，完璧にやりたいとの思いが強く，人には任せられないと思っていることをあらわしている．まるでこれまでの仕事の延長線上に介護を位置づけて，自分が介護をしないといけないとの思いを持って介護していた．だからこそ，介護に意味づけして介護方法は自ら決めて自分のやり方でやりたいし，思うようにする．被介護者にも自分の思い通りに従ってほしいと考えている．それは，家族愛や親子愛を育むことになる一方で閉鎖性や排他性につながる可能性も含んでいる．なんとか頑張って介護するが，行き過ぎると虐待につながる可能性も否定できない．そのことをも考慮した男性介護者への支援が必要になると考えられた．

[介護方法は自分で学びとる]という特徴は，人生の後半で直面した新たな生活の中で，とりわけ介護方法は自ら学びとる姿勢で取り組んでいることをあらわしている．知識が必要

な介護方法については書籍から知識を得ることで対処しており，あまり人に頼ろうとしていなかった．社会資源の一つである介護者会の存在を認識していても介護者の会には参加したがらない．その理由は，愚痴を言いあっても介護をするうえでの問題解決につながらないと思っているからであった．彼らの多くは，ピアカウンセリングによる交流から得られる情緒的な支援を求めていないと考えられた．そのため，男性介護者には，介護に役立つ知識や技術が明確に得られる会を企画する必要性があることが示唆された．

[社会で働いていた知恵が介護に活かされている]という特徴は，社会で働いていたときに得た知恵を活かした行動をとっていることをあらわしている．それは，介護を行う上での時間管理が上手いことからもわかる．これまでの人生で得た経験からストレスを発散する方法や情緒的な安定を図る方法を心得ていると考えられた．そのうえ，勤めていた社会での経験を活かすかのように，社会の制度などを調べ自ら選択し使いこなし彼らのもつ能力を発揮していた．困っていることは自ら解決しようと試み，他人には弱みを見せようとしない姿勢がみられた．

[先を見越した介護をする]という特徴は，被介護者の先の状況を見越した関わりをしていることをあらわしている．たとえば，病気の経過をみながら今よりも良くなるようにと考えて介護に取組んでいた．リハビリテーションで回復を望み，その目標を定め，回復への期待感があった．それはまさに，成果を求めた関わりであり，彼らが培った仕事への取組みと同様であると考えられた．また，被介護者の急性期・終末期の対応についての判断基準を準備していた．その判断基準は病状の変化に対応したものであり，在宅での看取りにこだわってはいなかった．それはこれまでの社会での経験や普段の決断力や行動力によると考えられた．彼ら自身の介護力と介護に対する思いから，被介護者の病状が悪化した時や終末期に至るまでの介護について見越した対応をしていた．

質問紙による分析結果とインタビュー結果と統合して考察すると，彼らは{介護をまるで仕事のように捉えて}，これまでに仕事で得た知識や対処方法を生かしながら，気分転換をはかれる時間を持ち介護に関する制度をうまく利用して，ストレスに対処し介護負担を軽減させていると推察された．

5．結論

本研究の対象となった男性介護者は，ストレス対処能力が高いかもしくは主観的健康感で健康状態が良いと感じている場合，介護負担感は軽くなっていた．被介護者の疾患の種類や重症度によって彼らの介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感に差違が認められなかった．また，男性介護者 27 人へのインタビューから，彼らの特徴は，4 カテゴリーと 11 サブカテゴリーで構成されていた．そして，男性介護者は{介護をまるで仕事のように捉えている}がコアカテゴリーとして抽出された．

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	植村　小夜子			
論文題目	Characteristics of Male Family Caregivers in Japan and Their Sense of Care Burden, Capacity to Deal with Stress, and Subjective Sense of Well-Being （日本における男性家族介護者の介護の実態：介護負担感、ストレス対処能力、主観的健康感と介護の特徴）			
審査委員	区　分	職　名	氏	名
	主　査	教　授	關戸　啓子	
	副　査	教　授	塩谷　英之	
	副　査	准教授	上杉　裕子	
	副　査			印

要　　旨

研究の目的は，日本の在宅で介護をしている男性家族介護者の介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感と彼らの特徴について明らかにすることである．調査対象者は日本で家族を在宅介護している男性 27 人であった．被調査者の自宅に訪問し，質問紙調査とインタビューガイドを用いた半構成的面接を実施した．調査の結果，男性家族介護者は，ストレス対処能力が高いか，もしくは主観的健康感が高いほど，介護負担感は低かった．インタビューから逐語録を作成し，質的帰納的に分析した結果，男性家族介護者の特徴は「介護方法にこだわりがある」「介護方法は自分で学びとる」「社会で働いていた知恵が介護に活かれされている」「先の状況を見越した介護をする」のカテゴリーで構成されていた．そして，「介護をまるで仕事のように捉えている」がコアカテゴリーとして抽出された．男性家族介護者はこれまでの社会での経験を活かし，まるで介護を仕事のように捉えて，被介護者の病状や日常生活の変化に対処しながら介護している可能性を明らかにした．

本研究は，男性家族介護者について，介護負担感，ストレス対処能力，主観的健康感と彼らの特徴について研究したものであり，男性家族介護者への看護について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める．よって，学位申請者の植村小夜子は，博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

発表論文

Sayoko Uemura, Keiko Sekido, Tetsuya Tanioka. Characteristics of Male Family Caregivers in Japan and Their Sense of Care Burden, Capacity to Deal with Stress, and Subjective Sense of Well-Being. Health. 6(18), 2444-2452, 2014